

教育学部

学校教育課程

人間社会課程

医学部

医学科

看護学科

工学部

材料物理工学科

物質環境化学科

電気電子工学科

土木環境工学科

機械システム工学科

情報システム工学科

農学部

食料生産科学科

生物資源科学科

地域農業システム学科

応用生物科学科

薬学系

平成20年度

宮崎大学概要

今、宮崎大学は



宮崎大学長
住吉 昭信

平成15年10月旧宮崎大学と旧宮崎医科大学は人的・知的・物的資源を結集し、機能を相補し、教育・研究の質的向上と活性化に取り組むために統合し、平成16年4月に国立大学法人宮崎大学になりました。そして「世界を視野に、地域から始めよう」のスローガンのもと、21世紀を展望しつつ知の継承、創造の殿堂として、活気と魅力に溢れた学風と個性輝くキャンパスを築き、地域との連携を密にして、宮崎の文化と風格を高め、地域の産業・経済界の発展

に寄与すると共に、世界に羽ばたくことを目指しています。

大学に求められる第一の機能は、有能で社会に貢献できる人材の育成であります。第二の機能は、社会の要請や課題に答えること、さらには自ら問題を見つけ、解決し、学問の進歩、社会の発展に貢献することです。

宮崎大学は、学士課程卒業者が身につけておくべき「学士力」、真に応用力があり、社会で役に立つ知識・技術が身に付くようより良い教育の実施を目指して改革に取り組んでおります。

宮崎県の産業・経済の発展には、基本産業である農林水産業、畜産業の振興を図る必要があります。「食の安全性」を巡ってのトレーサビリティや残留農薬の問題、機能的食品の開発、農業畜産廃棄物などのリサイクル、環境保全を図る取り組みなど、今やどれ一つをとっても伝統的な農学を深化させるだけでは解決不可能で、工業技術の協力が不可欠であります。そういう意味で農学と工学が知恵を出し合って連携して総合的な教育を行い、必要な人材を輩出する教育を行うために平成19年4月には、「宮崎大学大学院農学工学総合研究科(博士後期課程)」を創設しました。平成20年4月には、学校現場で通用する即戦力をも備えたスクールリーダーを養成するために教職大学院を開設しました。

宮崎大学医学部附属病院は、宮崎県唯一の特定機能病院として、宮崎県民の医療、福祉に貢献するために努力しております。平成18年から老朽化した病院の再整備に取り組んでおり、それが完了しますと宮崎県の最先端医療を担うに相応しい病院に生まれ変わります。宮崎県の医師不足を解消するために本県の医療に貢献する医師の養成も宮崎大学が担う役割と認識しております。

このように宮崎大学は現状に満足することなく、教育研究を活性化し、医師養成機能と病院機能を充実し、不断に大学の改革を続けながら、地域社会や時代の要請に応える大学を目指しております。

平成20年度

宮崎大学概要

CONTENTS

■ 学長挨拶	2
■ 目次	3
■ 大学の理念・目的	4
■ シンボルマークについて	4
■ 大学のスローガン	4
■ 宮崎大学の歌	4
■ 年間スケジュール	5
■ 沿革	5
■ 教育の特色	6
■ 研究の特色	8
学部紹介	
■ 教育文化学部	10
■ 医学部	12
■ 工学部	14
■ 農学部	16
大学院紹介	
■ 附属図書館	23
■ 学内共同教育研究施設	24
■ 安全衛生保健センター	25
■ 情報化推進組織	25
■ 国際交流	26
■ 地域貢献	27
■ キャンパスマップ	28
■ アクセス	30
資料編	
■	32

大学の理念・目的(基本的な目標)

人類の英知の結晶としての学術・文化・技術に関する知的遺産の継承と発展、深奥な学理の探究を目指す。また、変動する多様な時代並びに社会の要請に応え得る人材の育成を使命とする。更に、地域社会の学術・文化の発展と住民の福利に貢献する。特に、人類の福祉と繁栄に資する学際的な生命科学を創造するとともに、生命を育んできた地球環境の保全のための科学を志向する。

シンボルマークについて

宮崎大学の頭文字「宮」をモチーフとして図案化し、さらにそれを擬人化したシンボルマークです。白い丸は、だんだん拡大される宮崎大学のイメージをあらわし、緑色の中の二つの丸は、統合した宮崎大学と宮崎医科大学を象徴するものとしてデザインしました。

さらに、図形は、躍動する若人の姿と全体の円を地球としてとらえたグローバルにはばたく姿も表現しています。

また、緑(グリーン)と青(ブルー)の2色は、自然豊かな宮崎の木々の緑と澄んだ空と海の青をイメージし、宮崎という地域にある本学のスクールカラーにふさわしい色として採用しました。



UNIVERSITY OF MIYAZAKI

大学のスローガン

世界を視野に 地域から始めよう

宮崎大学の歌

作詞:熊瀬川 逸子 補作:菅 邦男 作曲:斉藤 武

一 空高く 神々の里 ひむかここ日向
青島望むこの台地 緑茂れる まなびや学舎で
先人の輝く轍 わだち踏みしめて
未来に架ける若人の みちしるべ夢と希望の道標
宮崎大学

二 ひゅうがなだ日向灘 はま浜木綿の顔色 暖かく
きら煌めく白い波のごと こころ心優しく清らかに
このはな木花の風土が はぐく育む命愛し
真理を求め 学びゆく 夢と希望の道標
宮崎大学

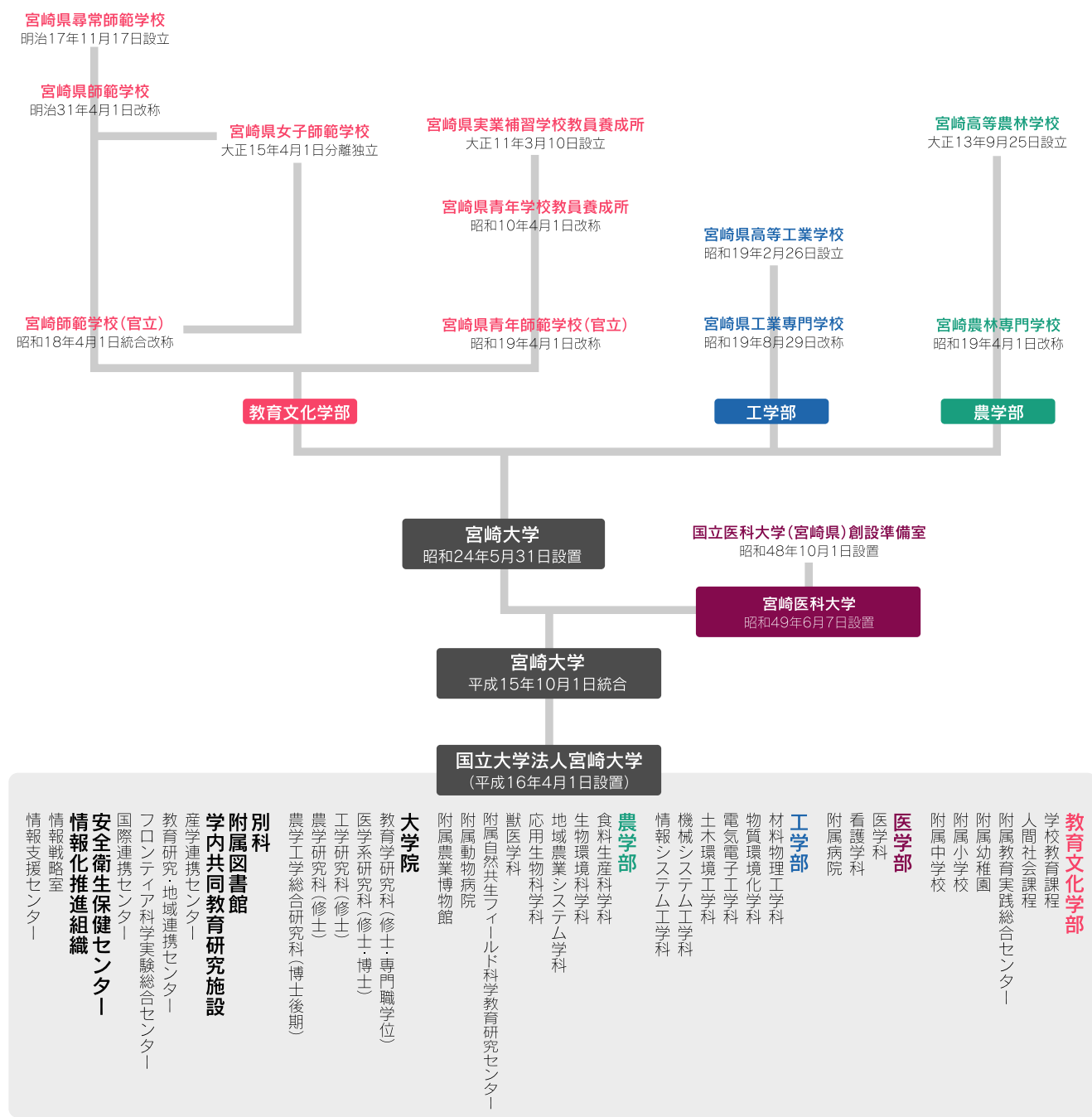
三 やまなみ山脈の美しい姿 おびすぎ飢肥杉の
てんくう天空さして在ることく りやう理想を高く意志強く
時を翔け自由を旅する 鳥のように
世界に広く羽ばたける 夢と希望の道標
宮崎大学

■年間スケジュール

4月 入学式 オリエンテーション 前学期授業開始 新入生歓迎祭	11月 大学祭
7月 前学期定期試験	12月 冬季休業
8月 夏季休業 進学説明会	2月 後学期定期試験
10月 後学期授業開始	3月 卒業式・修了式 春季休業

※変更となる場合もあります。

沿革



宮崎大学の教育の特色

宮崎大学では、生命科学や環境保全の科学に親しむとともに、宮崎の恵まれた自然、或いは地域社会からも色々なことを学ぶという事を目標理念として教育を行うとともに、その教育方法にも特色を持たせ、常に改善を図っています。

大学の全学生が関わる共通教育の中には、学生の皆さんの人生設計に関するキャリアデザインを学ぶ科目、或いは地域宮崎を学ぶ科目などを充実させ、多様な社会の中で、自らの道を考えていけるような教育を行っています。その中には、学生グループに対して、「とっっても元気!宮大チャレンジプログラム」と銘打って、学生自らが大学及び地域を活性化するプロジェクトを企画、運営、管理する事業も進めています。これには毎年多くの学生の皆さんが参加し、地域の方との連携も含め、仲間と共に活動しています。更に、2008年度からは、自らの専門分野を英語できちんと説明し、議論できる国際的な専門職業人育成を目指すための英語改革プログラムに取り組んでいます。

各学部、或いは大学院研究科で行う専門教育では、高度専門職業人や研究者の養成を目指し、それぞれの学部などの特徴を出せる科目を多く取り上げ、宮崎大学ならではの教育を実施しています。特に、大学院では、地域の特徴を活かし地域から求められている人材育成を図るために2007年4月には全国で初めて農学工学総合研究科博士後期課程を設置し、活発な教育研究活動を行っています。更に、2008年4月からは、全国に先んじて教職大学院を教育学研究科に設置し、地域の教員養成に努めることとしています。また医学系研究科では組織再編を行い、臨床医教育を重視した人材養成に重点を移しています。

このような教育環境の中で、宮崎大学は他にも表に示すような特徴ある教育プロジェクトを実施しています。例えば、特色ある

大学院教育や、医療人養成推進プログラムは、国から大きなプロジェクトとして任せられ、発展させています。更に、技術者教育に関しては、国際的にもその教育効果が保証されるJABEEという認証を受けている学科も多くあり、国の施策である実践型専門技術者養成プログラムとも連携を図っています。また、人獣共通感染症や植物遺伝に関わる分野については生命科学の観点から教育を行い、更に、環境負荷低減のための技術開発者の養成も学部間の協力の下、教育体制としても組み込まれています。

宮崎大学の教職員は常に、教育理念に沿った教育をどの様に行うのか、問題点をどの様に改善していくかという意識を持って教育活動にあたっていると同時に、学生の皆さんの意見も積極的に取り入れるようにしています。この様な一連の教育改革は、2007年度には大学評価学位授与機構の認証評価を受け、宮崎大学は大学評価基準に沿った適切な教育機関であることが認定されています。常に前向きな姿勢を持ち続ける事が、これからの宮崎大学の教育を一層良くするための責務と考え、教職員、学生の皆さんが一緒になって新しい宮崎大学を作って行こうとしています。



宮崎大学の教育戦略

宮崎大学の教育目標

1. 人間性の教育

- 高い倫理性と責任感を育むとともに、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する。
- 生命や環境保全の科学に親しむとともに、広く自然や社会に触れ、現場から学ぶ態度を育成する。

2. 社会性・国際性の教育

- 社会の多様な要請に対応して、社会の発展に積極的に貢献できる課題解決能力を育成する。
- 日本語による論理的な思考・記述や発表の能力を育成するとともに、外国語によるコミュニケーション能力を育成する。

3. 専門性の教育

- それぞれの専門分野に関する基礎的知識を修得し、それらを応用できる能力を育成するとともに、専門分野への深い興味を育み、課題探求および解決能力、自発的に学習する能力を育成する。
- 大学院においては、高度の専門知識、研究能力及び教育能力を備えた人材を養成する。

**目標を実現するための戦略
(教育の質の向上を図る)**
— 学生が伸びる大学教育 —

人間性・社会性・国際性の教育
教養教育の体制の確立
教養教育の教育内容の点検
学生の社会性育成教育の実施

専門性の教育
教育内容・体制の整備
地域を意識した特色ある教育の実施

教育方法の改善
単位の実質化と組織的FD活動の推進

教育方法の検証
根拠資料に基づく評価と教育情報の公開

学生支援・学生支援体制の整備
学習環境の整備
学習状況を分析し、到達度に応じた指導
就職支援体制の強化、社会性育成教育の推進

入学者選抜・選抜方法の改善
学部および大学院入学志願者増加

(注)「人間性」、「社会性・国際性」の教育は、教養教育に限らず教育課程全般に適用されるものである。

教育体系の基本的考え方

学士課程

- 教養教育と専門教育により編成
- 宮崎大学の教育が目指す教育目標に応じた教育課程を編成し質の向上を図る。
- 専門教育においては教養教育と連携を保ち、学部等の専攻に係る専門の学芸を修得し、専門的職業人としての基本的技能・態度を育成する。

大学院課程

- 教育目標に応じた教育課程を編成し、高度専門職業人等を育成するため、高度な専門教育を行う。

宮崎大学の教育プロジェクト (平成20年度現在)

研究課題名等	研究種目等	期 間	学部等
国公立大学を通じた大学教育改革の支援	※1		
国際的に活躍できる専門職業人育成を目指した 学士課程一貫英語学習プログラム	教育改革(教育の質の向上に向けた改革の推進)	2008-2010	全学
産婦人科医・小児科医が連携した医師養成プログラム	地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム	2006-2008	医
JABEE(ジャビー)	※2		
工学部 土木環境工学科	土木及び土木関連分野	2004-	工
工学部 物質環境化学科	化学および化学関連分野(応用化学コース)	2005-	工
工学部 電気電子工学科	電気・電子・情報通信およびその関連分野	2005-	工
農学部 応用生物科学科	農学一般関連分野	2005-	農
工学部 機械システム工学科	機械および機械関連分野	2006-	工
工学部 情報システム工学科	情報および情報関連分野	2006-	工
特別教育研究経費			
人獣共通感染症教育モデルカリキュラムの開発	教育改革	2005-2009	農、医
遺伝資源専門技術者養成モデルカリキュラムの開発	教育改革	2006-2009	農、FSRC

※1: 大学における学生教育の質の向上を目指す特色ある優れた取組をサポートする文部科学省のプログラム。

※FSRC…フロンティア科学実験総合センター

※2: 日本技術者教育認定機構。これに認定された教育プログラムは、教育活動の品質が国際的レベルにあることや、技術者として活動するために必要な最低限度の知識や能力の養成に成功していると評価されたことになる。

宮崎大学の研究の特色

宮崎大学は「人類の英知の結晶としての学術・文化・技術に関する知的遺産の継承と発展、深奥なる学理の探求を目指す。また、変動する多様な社会の要請に応え得る人材の育成を使命とする。更に、地域社会の学術・文化の発展と住民の福利に貢献する。特に人類の福祉と繁栄に資する学際的な生命科学の創造を志向するとともに、生命を育ててきた地球環境の保全のための科学を志向する」ことを基本理念として定めています。この基本理念に基づいて、平成19年1月に宮崎大学研究戦略として基礎・基盤的研究、萌芽的研究の継続的な推進を図りつつ、生命科学・環境科学・エネルギー科学を研究目標として掲げ、それぞれに特色ある重点領域を定め、研究に取り組んでいます。

平成19年3月で終了した21世紀COEプログラム「生理活性ペプチドと生体システムの制御」では事後評価結果において「設定された目的は概ね達成され、期待どおりの成果があった」との評価を受けました。これまでにナトリウム利尿ペプチド、アドレノメジュリン、グレリンをはじめ約50種類の生理活性ペプチドの発見とその機能解析において世界をリードする実績を上げています。さらにはフロンティア科学実験総合センターを拠点として学部横断的な生理活性物質の構造・機能解析研究が特別教育研究経費を受けて推進されており、平成19年度から科学研究費基盤研究(S)「新規ペプチドを用いた畜産・獣医領域におけるトランスレーショナルリサーチ」の採択へと繋がっています。また、平成15～20年度宮崎県地域結集型共同研究事業として、「食の機能を中心としたがん予防基盤技術創出」が宮崎県と本学の医学部・農学部・工学部の連携事業として進行中です。ブルーベリー葉にC型肝炎ウイルスの増殖抑制効果を見いだすなど、数々の成果が生まれています。

平成19年1月には宮崎県において高病原性鳥インフルエンザが発生しましたが、迅速かつ適切な対応で封じ込めることができました。本学では医・獣医が連携協力して人獣

共通感染症の研究に取り組んでおり、特にO-157などの腸管出血性大腸菌や、そのほか種々の病原体のゲノム解析研究が学際的に推進されています。また、国の新興・再興感染症ネットワーク構築計画の一環として平成17年度からスタートした特別研究教育経費教育改革事業「人獣共通感染症教育モデルカリキュラムの開発」が農学部獣医学科と医学部との連携協力によって継続されています。

地域課題であるバイオマスの処理とその有効利用について都市エリア産学官連携促進事業として推進された都城盆地エリアでのバイオマスエネルギーの高度利用に関する研究が平成18年度で、また宮崎県北臨海エリアでの海洋性バイオマス活用技術の創出研究が平成19年度で終了となりましたが、これらの環境保全によるバイオマス資源の効率的生産に関する研究と技術開発は平成18年度から宮崎大学と宮崎県との連携融合事業として特別研究経費による「農林畜産廃棄物利用による地域資源循環システムの構築」プロジェクトへと発展しています。さらに、微生物の利活用と温暖地域特有の豊かなバイオマス資源から新たな化石燃料代替エネルギーの創成とその貯蔵技術の開発研究にも取り組んでいます。

さらに、光科学、極端紫外光レーザー光源の開発に関する研究は文部科学省リーディングプロジェクトとして大阪大学を中心とする4大学の共同研究として展開され、さらに特別研究教育経費事業として「真空紫外光で拓く環境調和型プロセスの創成」が工学部と産学連携センターで進められています。また、ナノテクノロジー、機能性ナノチューブの合成に関する研究が科学技術振興機構(JST)の戦略的創造研究推進事業としても採択されており、いずれも産学官連携事業として今後の発展が期待されます。

基礎・基盤研究の特筆すべきものとして平成14年度から始まったナショナルバイオリソースプロジェクト:ミヤコグサ・ダイズリソース拠点事業があります。本学のサポート体制が高く評価され、平成19年度からも第2期

の継続が認められています。平成20年3月にスペースシャトルエンデバー号に本学が提供したミヤコグサの種子が搭載され、土井隆雄宇宙飛行士により国際宇宙ステーションに取り付けられた「きぼう」の船内保管室に向こう半年間保管され、回収される予定となっています。平成18年度から本学と京都市芸繊維大学との連携による特別教育研究経費教育改革事業「遺伝資源専門技術者養成モデルカリキュラムの開発」が進行中で、生物遺伝資源を扱う人材養成にも力を注いでいるところです。

社会貢献的研究として特筆すべきものとして、宮崎県全域をカバーする周産期医療システムの構築と周産期脳障害の病態解明の研究が進められています。これらの成果は我が国で最も低い周産期死亡率の達成・維持に貢献し、モデルシステムとして全国的にも注目されています。また、宮崎県がスポーツキャンプのメッカである地域特性を活かし、特別教育研究経費連携融合事業として「スポーツ外傷・障害の病態解明—スポーツメディカルサポートシステムの構築—」を宮崎県と連携して推進しています。

本学の研究成果を活かした国際連携研究としては、アジア地域での地下水砒素汚染対策研究や、環境に配慮した魚介類養殖技術の研究、キチン・キトサンなど海洋性バイオマスを利用した希少貴金属の分別回収技術などが特筆すべきものです。平成20年5月には宮崎大学初の寄附研究部門としてアジア地下水砒素汚染対策研究部門が産学連携センターに設置されます。いずれも国内外から高い評価を受けており、大型プロジェクト研究費を獲得しており、ますますの発展が期待されます。

宮崎大学は「世界を視野に、地域から始めよう」のスローガンの下に、研究成果を世界に向けて積極的に発信することにより、特色ある国際的研究拠点形成を目指し、地域貢献、国際貢献を果たします。

宮崎大学の研究戦略

宮崎大学が研究を通じて実現を目指す社会

- ・健やかな心と体を育成する社会
- ・安心・安全な生活をサポートする社会
- ・環境保全を優先し、かつ地域エネルギー利用の進んだ社会

実現のために

重点研究領域

I 生体制御・防御機構と環境
ー 生理活性物質と機能性食品の探索 ー

II バイオマス資源の生産・有効利用
による環境改善・修復に関する研究と技術開発

III 再生可能エネルギー変換・貯蔵技術
および低環境負荷型生活様式に関する研究

継続中のプロジェクト

【生命科学分野】

- 新規生理活性物質探索と生体制御・防御機構解明 (医・農・FSRC)
- 食機能による疾患予防基盤技術創出 (医・農・工)
- ゲノム・ポストゲノム解析による疾病対策研究 (医・FSRC・農)
- 人獣共通感染症に関する研究 (農・FSRC・医)
- スポーツメディカルサポートシステムの構築 (医・工・教)

【環境・エネルギー分野】

- 農林畜産廃棄物利用地域資源循環システム (農・工)
- 海洋性バイオマス活用技術 (工・農)
- アジア地域における砒素汚染対策に関する研究 (工・農・教)
- 高機能ナノチューブ材料・多層超薄膜半導体の創製とエネルギー交換技術への応用 (工)
- 極短波長光源の計測および環境調和型プロセスへの応用 (工)

新規計画プロジェクト

- 長寿科学と生命科学倫理 (医・FSRC・農・教)
- 機能性食品開発 (農・医・工)
- 動植物バイオリソース研究 (医・農・FSRC)

- 低環境負荷・資源循環型生物生産技術 (農・工・教)
- 環境負荷物質の分解技術 (農・工)

- 環境共生・持続発展型地域社会を実現する低環境負荷型生活環境の整備 (工・農・教)
- 光エネルギー制御・変換技術を利用した再生可能エネルギーシステムの構築 (工)

予想研究成果

疾患の新しい予防・診断・治療技術の創出

安全・安心な食料生産とバイオマスを活用した環境保全技術の実現

宮崎の自然を活用したエネルギー生産と省エネ・安全な生活環境の実現

世界に向けた研究成果の発信

- ・国際的研究拠点形成
- ・国内外研究機関との連携
- ・国際および地域への貢献

宮崎大学の大型研究プロジェクト (平成20年度現在 予算総額が2,000万円以上のもの)

※緑字は地域連携

研究課題名等	研究種目	研究期間	学部等
女性研究者支援			
逆風を順風に 宮崎大学女性研究者支援モデル	科学技術振興調整費(女性研究者支援モデル育成事業)	2008-2010	全学
生理活性物質の探索			
生体活性物質の構造・機能解析のための学部横断的研究の推進	特別教育研究経費(研究推進)	2005-2009	医、農、FSRC
新規ペプチドを用いた畜産・獣医領域におけるトランスレシヨナルリサーチ	基盤研究(S)	2007-2011	農
食の機能を中心としたがん予防基盤技術創出	JST/宮崎県 地域結集型共同研究事業	2003-2008	医、工、農
注射に代わる経鼻投与デバイスを用いた糖尿病と肥満に対するペプチド医薬品の開発	JST 重点地域研究開発推進事業	2007-2009	医
遺伝子と疾病			
骨粗鬆症治療戦略の開発と応用	保健医療分野における基礎研究推進事業	2006-2010	医
人獣共通感染症			
腸管出血性大腸菌を中心とした腸管感染菌の病原性ゲノム基盤の解明と臨床応用	特定領域研究	2005-2009	FSRC、医
人獣共通感染症教育モデルカリキュラムの開発	特別教育研究経費(教育改革)	2005-2009	農、医
生物遺伝資源			
ナショナルバイオリソースプロジェクト(ミヤコグサ・ダイズ遺伝資源の収集・保存・提供)	文科省科学技術振興費	2007-2011	農
遺伝資源専門技術者養成モデルカリキュラムの開発	特別教育研究経費(教育改革)	2006-2009	農、FSRC
最先端クルマエビ養殖技術の構築ー安全・安心・健康なエビを作るー	AFFRAC 生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業	2006-2010	農、工
バイオマス/資源再利用			
ゴーヤ種子由来坑Hレクチンを用いた血液検査試薬の開発と新規医薬品への応用	JST 重点地域研究開発推進事業	2006-2008	農
農林畜産廃棄物利用による地域資源循環システムの構築	特別教育研究経費(連携融合事業)	2006-2010	農、工
鶏ふん焼却灰からのリン回収・有用物活用の技術開発	農林水産省「先端技術を活用した農林水産研究高度化事業」	2007-2009	工
バイオマスエネルギー高効率転換技術開発	独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)バイオマスエネルギー先導技術研究開発	2007-2008	農
宮崎県産シイラを用いた「焼酎もろみ漬け」の研究開発	地域資源活用型研究開発事業	2007-2008	農
宮崎県産オビスギ材の乾燥凝縮液を有効活用した製品の開発	地域資源活用型研究開発事業	2007-2008	工
宮崎県産スイートピーの未利用分を原料とした機能性製品の開発	地域資源活用型研究開発事業	2007-2008	農
鹿児島県の焼酎粕と乳成分を用いた新規濃度ピフイス菌飲料の開発	地域資源活用型研究開発事業	2007-2008	工
ナノテク/光科学・材料科学			
真空紫外光で拓く環境調和型プロセスの創成	特別教育研究経費(研究推進)	2006-2008	工
ナノ制御した置換型金属酸化物触媒表面における選択酸化反応評価	JST 戦略的創造研究推進事業	2004-2008	工
高機能ナノチューブ材料の創製とエネルギー交換技術への応用	JST 戦略的創造研究推進事業	2002-2008	工
白金ナノグループをベースにした炭素系触媒の開発	JST 産学共同シーズイノベーション化事業	2007-2008	工
極端紫外光を用いた光脱離質量分析装置の開発	経済産業省提案公募型実用化技術開発事業	2007-2008	工、産
国際連携			
マリンバイオマスを活用した貴金属のゼロエミッション分離回収システムの構築	JSPS 二国間交流事業(オーストラリアとの共同研究)	2006-2008	工
インドUP州における地下水砒素汚染の総合的対策	JICA 草の根技術協力事業	2007-2009	工、医

※FSRC・・・フロンティア科学実験総合センター ※産・・・産学連携センター

教育文化学部

(入学定員230人)

教育文化学部では、日本の将来を担う子どもたちを教育する教員を養成し、また、日本・アジア・欧米の言語や文化、法律・政治・経済・福祉などの社会のシステムに関する教育と研究を行っています。したがって、各課程の教育を受けるにふさわしい基礎学力を備えるとともに、向学心、職業意識、社会への関心の高い人を受け入れることを目指して、多様な入学者選抜を行います。

● 学校教育課程 (入学定員150人)

- 初等教育コース 75人
- 中学校教育コース 60人
- 特別支援教育コース 15人

学校教育課程は、学校現場に関わる諸問題や児童・生徒の心身の諸問題について、また学校で何をどのように教えるか等について、専門的に学びます。とくに、今日の多様化した子どもたちに愛と情熱をもって接し、個性を正しい方向に生かすことのできる、柔軟な思考と豊かな感性と広い教養を備えた質の高い教員の養成を目指しています。

そのために、子どもたちの発達段階を見通した広い視野から、初等教育(11専攻)、中学校教育(10専攻)、特別支援教育の3コースに分かれており、それぞれを重点的に実践できるよう、カリキュラムが組まれています。

専攻やコース独自の科目とともに、一般に小学校や中学校や特別支援学校等の教員になるために必要な科目、つまり教職科目を学習します。教職科目には介護等体験実習、教育実習が含まれています。



● 人間社会課程 (入学定員80人)

- 言語文化コース 15人
- 社会システムコース 65人


現在の社会は、グローバル化と情報化の進展という大きな変動の中にあります。人間社会課程は人文科学、社会科学の諸分野の学習を通して、堅実な学問的基礎力をつけながら、人間・社会・文化についての幅広い教養と国際的視野を持ち、併せて現代社会の抱える諸課題に対する実践的解決能力を持った人材の養成を目指します。そのために本課程では、「欧米思想」(哲学、思想の認識を深める科目)「国際関係論」(現実世界の国際関係を考察)「実践的地域マネジメント論」(社会の現場で具体的に取り組まれている諸課題を実践者から直接学ぶ科目)の3科目を課程の必修科目に設定しています。その上で言語や文化という人文科学を中心に学ぶ言語文化コースと、社会科学分野を中心に社会を対象にする学問分野を学ぶ社会システムコースの2つのコースに別れて学習し、それぞれの専門性を深めます。



● 附属教育実践総合センター

「教育実践研究部門」では「学ぶ力」「生きる力」を高めるための学習カリキュラム及び指導法の開発、「教育情報科学研究部門」ではIT時代の到来を踏まえ、大きく変化する新しい時代の学習・教育環境の構築、「教育臨床研究教育部門」では学校不適応等、子どもが抱える様々な問題に対応できる力量をもった学生、現職教員の養成に努めています。





「知」を磨き、「学」を伝える。知識豊かな人材を育てる。

●附属学校

附属幼稚園

昭和42年に開設されました。広々とした園庭には、数十年を経過した銀杏や楠等が大きな枝を広げ、四季折々の豊かな自然環境を日々の保育に活かしています。「生き生きと活動できる子どもを育てる」を教育目標とし、子どもの自発的な活動を重視しながら、人のかかわりを大切に保育に努めています。



附属小学校

学部と一体となった体制で小学校教育の研究と実践、さらには教育実習の指導に努め、本県教育の維持向上の一翼を担っています。「確かな学びのある授業の創造～豊かに表現し合い、高め合う学習の展開」を研究テーマに実践的研究を行っています。



附属中学校

昭和22年、宮崎師範学校の附属中学校として開設された伝統のある学校です。「気品を保ち、社会の変化に主体的に対応できる個性豊かな生徒の育成」を学校の目標とし、「①自発的に学び、真理を探究しよう ②勤労を愛し、お互いに協力しよう ③気品を保ち、健康を増進しよう」を細目として掲げ、活力ある学校づくりを進めています。



医学部

(入学定員160人)

医学部は、昭和49年に設立された宮崎医科大学を前身とし、平成15年10月に宮崎大学と統合し、宮崎大学医学部となりました。

医学部は、「地域における医学・医療の中心的な役割を果たすと同時に、進歩した医学・看護学を修得せしめ、人命尊重を第一義とし、医の倫理に徹した人格高潔な医師、医学研究者、看護職者及び看護学研究者を育成し、国内外の医学及び看護学の水準向上と社会福祉に貢献すること」を使命としています。

● 医学科 (入学定員100人)

医学科は、宮崎の地域医療に貢献でき、国際的にも活躍できる優れた医師の育成を目指しています。本学科の卒業生は、臨床医師、医学研究者、あるいは医学教育者として幅広い分野で活躍し、医学の発展と社会福祉の向上に貢献しています。

● 求める人材

患者の痛みや苦しみに共感できる豊かな人間性を有している人

協調性・コミュニケーション能力を持っている人

医療人になろうという目的意識を持ち、医学を学ぶために必要な幅広い基礎学力と応用能力を有している人

自ら課題を見つけ解決しようとする意欲と行動力を持っている人



● 看護学科 (入学定員60人)

看護学科は、看護による健康への支援を通して、社会と地域の保健医療に貢献できる人材の育成を目指しています。本学科の卒業生は、豊かな人間性を有した看護師、保健師、または助産師として、人々の健康と生活への援助を実践し、看護の質の向上と看護学の発展並びに社会の福祉に貢献しています。

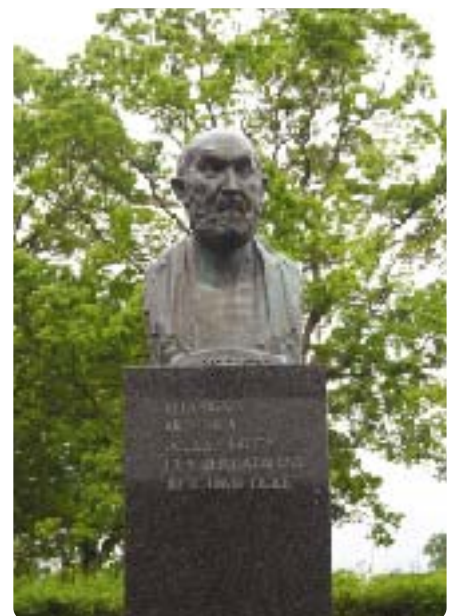
● 求める人材


生活している人々の身体的・精神的健康に関心が持てる人

人の気持ちに共感でき、コミュニケーションがとれる人

看護職者になろうという目的意識を持ち、看護学を学ぶために必要な基礎学力を有している人

自ら課題を見つけ解決しようとする意欲と行動力を持っている人





～地域から世界へ～人間性豊かな医療人の育成。

● 医学部附属病院

宮崎大学医学部附属病院は、昭和52年に開設された地上7階の建物に、総病床数612を有する宮崎県における中核的医療機関です。

診療のみではなく、在学生の臨床教育の場でもあり、卒後2年間の研修医としての初期臨床研修、それに続くレジデント・医員としての診療や研究並びに開業医や勤務医の生涯学習のための研修の場でもあります。

平成6年に特定機能病院の指定を受け、高度医療に関する研修を実施する能力・人員配置及び構造設備等を有し、高度医療技術の開発や評価も行っています。

平成20年には日本医療機能評価機構による「病院機能評価ver5.0」の認定を受け、最新の高度な医療を安全に提供しています。

また、患者さん本位の医療を達成することを目的に、各診療科及び各中央診療部門に、最新の医療機器と優秀なスタッフをそろえ、医療内容の高度化、多様化に加え、時と共に変わる疾病構造の変化にも適切に対応できる体制を整え、地域に貢献できる、より良い病院を目指しています。

さらに、平成18年11月からは、中央診療棟の新設、外来棟の新設、病棟等の改修を柱とした附属病院再整備に着手し、第一期工事として、平成19年12月に中央診療棟が竣工しました。また、同月には市内中心部に「宮崎大学医学部附属病院歯科口腔外科橘通りクリニック」を開設し、平成20年2月には「都道府県がん診療連携拠点病院」の認定を受け

るなど、一層の病院機能の向上を目指しています。

● 理念

良質な医療を提供するとともに、医療人の育成と医療の発展に貢献し、患者さんに信頼される病院を目指します。

● 基本方針

1. 患者さん中心の最適な医療の実践
2. 地域の要望にこたえる医療の実践
3. 先端医療の開発と提供
4. 人間性豊かな医療人の育成
5. お互いを尊重し、チームワークのとれた職場環境の整備



工学部

〈入学定員370人〉

工学部は、宮崎県唯一の工学部として、“宮崎に根ざし、世界に目を向けた工学部”を目標に、今後ますます進展する高度な科学技術に挑戦し、創造することができる人材の育成につとめ、国際的にも評価される質の高い学術研究活動を進めています。さらに、地域産業の発展を推進することにより、地域社会に知的な貢献をすることにつとめています。本学部では6学科の連携協力による教育・研究分野の高度化、学際化、総合化を推し進め、21世紀の地球環境と共生できる科学技術の創造と、それを担う人間性豊かな人材の育成を目指しています。

●材料物理工学科(入学定員49人)

現代社会の急速な発展を支えているのは、現代物理学を基盤とした高度な科学です。本学科では、このような先端技術を支える物理的知識を基礎から理解し、応用して社会の各方面で活躍できる人材や、新しい先端技術を切り開くことができる人材の育成を目指しています。

●物質環境化学科(入学定員68人)

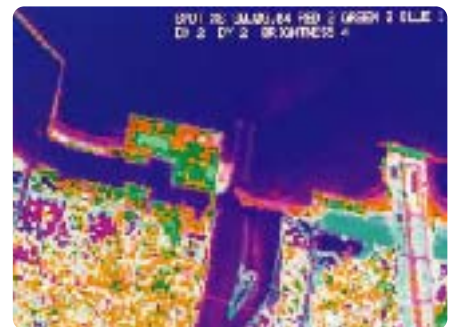
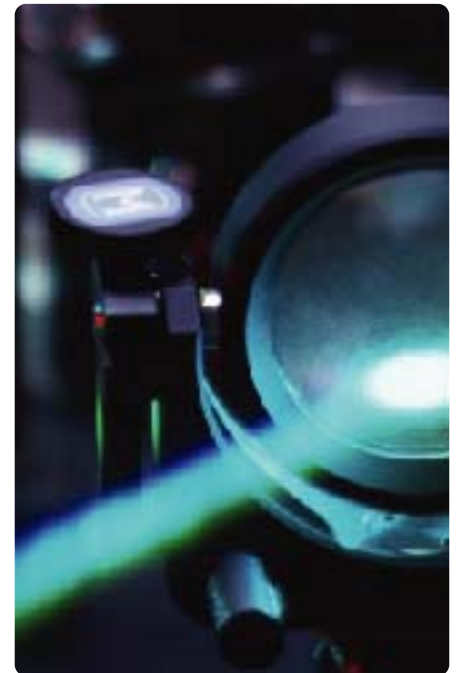
環境、エネルギー、資源、食料など21世紀に人類が直面する地球規模の諸問題を解決するため、化学物質が持つ無限の可能性を開拓すると同時に、その開発や利用において実用性だけでなく自然界や生体への影響、省エネルギーやリサイクルといった地球環境との調和を重視した物質の生産および環境保全の化学を研究しています。本学科では、JABEEの認定を受けた技術者教育プログラムに基づき、地球環境問題に対する「物質環境化学」の役割と使命を教育し、地球環境や生態系に調和した新素材の開発や物質の利用及び循環・再生技術などに係わる化学の基礎知識と応用能力を有する創造性豊かな人材の育成を目指しています。


●電気電子工学科(入学定員88人)

急速に進みつつある高度最先端技術における先駆者の養成をめざして教育・研究を行っています。このため基礎から実用性の高い応用科目までをバランスよく配置したカリキュラムとなっています。基礎科目として、数学・物理学・電磁気学・電気回路などの知識を正しく理解した上で、固体物理学、電子回路、コンピュータアーキテクチャ、制御、レーザー、プラズマなどの専門科目を勉強し、新しい機能素子、超高密度集積回路、コンピュータシステム、制御システム、新しいエネルギーの発生や輸送についての研究へと発展させていきます。

●土木環境工学科(入学定員58人)

本学科は、自然との共生を図りつつ生活・経済・文化・安全を支える社会基盤の充実に貢献できる高度技術者(Active, Responsible, Creative and Humane Engineer)の育成を目指しています。このため、平成16年にJABEE認定された教育プログラムに基づき、技術者としての能力および土木環境分野における基礎能力を養成する教育研究を実施しています。

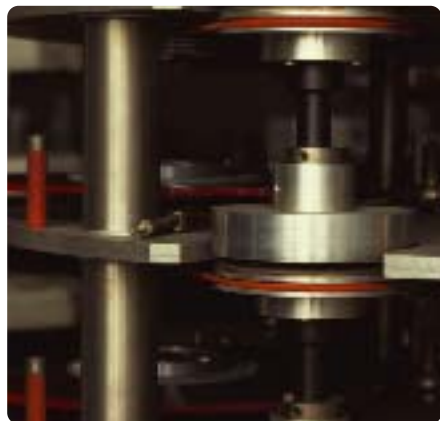




次世代技術・産業への貢献。

● 機械システム工学科(入学定員49人)

21世紀の工業技術者には、専門知識を身につけるだけでなく、技術者としての倫理観や地球環境問題の理解など多面的な能力が要求されています。本学科は、宮崎における自然環境の恵の中で「人にやさしく」かつ「自然と調和できる」機械を生み出す素養をもった創造性豊かな技術者の育成を目的としています。そこで、人との共存を考えた機械を作るための設計に関する知識、並びに自然と調和できる機械を作るためのエネルギー問題を考える知識を身につける教育に重点をおいています。



● 情報システム工学科(入学定員58人)

現在の情報技術の進歩は目覚ましいものがあり、産業界や経済界の急速な発展を支えています。本学科では、このような急速に進展しつつある高度情報社会の各方面で幅広く活躍できる人材を育成することを教育目標とし、情報工学の高度な専門知識と現実社会での問題解決能力とを兼ね備えた人材の育成を目指しています。



農学部

〈入学定員265人〉

21世紀の農学の使命は、わたしたち人類の生存と他の生物との共存・共生を図りながら、有用な生物資源の生産・開発・利用を行うことによって、地球規模での食料問題と環境危機を克服することです。日本の食料生産基地に位置し、今日までの農業発展に貢献してきた宮崎大学農学部は、「食料・環境・生命問題の解決」と「平和で潤いのある地域社会の構築」という人類共通の目標を掲げ、その実現のために平成12年度に組織と教育の両面の改組・改革を行いました。今後、日本だけでなく、アジア、アフリカ、中南米など世界の農業発展に向けての一層の学術貢献と、主体性と創造性に富んだ個性豊かな人材を輩出する責務が果たせると信じています。

● 食料生産科学科 (入学定員60人)

私たちの人類の幸福と繁栄は、人の命を支える食料なしでは実現しません。食料の安定した生産が人間のさまざまな活動を可能にして、文明や文化の発展につながってきているのです。生物の生産物を食料として利用している人類は「生物生産をいかに行うか」という課題をいつも抱えているのです。この課題に取り組むことは、農学の重要な使命の一つです。本学科は、植物と動物を対象にして「安全で高品質な生産物を、いかに効率的に、環境負荷を少なく、安定的に生産するか」ということについて教育と研究を行い、これからの食料生産システムの構築に向けて学術的・教育的貢献を行うことを目指しています。

● 生物環境科学科 (入学定員65人)

私たち人類が生存するためには、地球環境を保全しながら生物を持続的に生産しなくてはなりません。そこで、私たちの学科では地域に根ざしながら、地球規模での生態系や自然環境に対する教育・研究を行い、環境に優しくて持続性のある生物生産とその有効利用のための技術の確立を目指しています。おもに、森林、草原・草地、河川、湖沼、海洋などを教育・研究のフィールドとしています。

● 地域農業システム学科 (入学定員55人)

皆さんは、「環境破壊」、「食糧やエネルギーの不足」などの言葉をニュースや新聞でよく見聞きしていると思います。これらは、21世紀を生きる私たちにとって解決しなければならない重要な課題となっています。私たちの学科は、自然環境と人間の生存環境が共存できる農山村地域を構築するための総合的な専門教育を通して新世紀の諸課題の解決に取り組んでいます。



日本・世界の食料・環境問題の克服を目指して。

● 応用生物科学科 (入学定員55人)

応用生物科学科は、地域や国際社会がかかえる生命・食料・環境問題に応えるため、動物、植物、微生物並びにそれらを利用した食品、また、それらを育む土壌・生態系が持つ機能を生化学的、遺伝子工学的および食品機能学的に解明するための教育研究を行っています。本学科の特色として、農芸化学を中心として畜産製造学、植物遺伝育種学、水産科学の関連した分野の幅広い知識を学ぶことが出来ます。



● 獣医学科 (入学定員30人)

皆さんは獣医学という言葉を知るとどのようなイメージが湧きますか？おそらく多くの方は、すぐに動物のお医者さんを連想すると思います。ところが実際は、獣医学はそれだけでなくもっと幅広い分野を含んでいます。動物と人との健康・福祉の向上のために、動物の病気の診断・予防・治療などはもとより、安心できる質の良い食糧の提供、地球全体の野生動物をはじめ生物資源の保護、生命科学研究といった多彩な活動を含み、国の内外からは、

社会や科学に貢献することが期待されている学問です。私たちは、畜産県である宮崎の特性を生かしながら、産業動物や伴侶動物に対する医療や福祉、人と動物に共通する病気の撲滅(鳥インフルエンザやBSEなど)、アカウミガメや野生馬などの調査や保護、アジアに目を向けた国際交流などの活動を通して、専門科目ごとに設置されている11講座と附属動物病院が、他学科と協力しながら、獣医学を実践しています。特に、平成17年度からは、『人獣共通感染症教育プログラム』を開設し、人と動物に共通する病気の撲滅に一層貢献したいと考えています。



■ 附属自然共生フィールド科学教育研究センター

平成13年度に、自然共生を目標に総合的な農学教育・研究を行うため、自然共生フィールド科学教育研究センターが発足しました。そこには、共生システム農学、食総合科学、環境科学の3部門があり、木花フィールド(農場)、田野フィールド(演習林)、住吉フィールド(牧場)及び延岡フィールド(水産実験所)の4附属施設が、フィールドセンターの教育・研究を支えています。

■ 附属動物病院

犬や猫などの病気の動物が大学周辺のみならず県外からも診察を受けに訪れ、地域動物医療の中心となっています。また、畜産地帯に位置するため、和牛などの産業動物医療にも力を入れ、地域の診療獣医師の相談・研修の施設としての役割も担っています。

■ 附属農業博物館

農業をテーマにした博物館は、全国でも珍しく、国立大学法人の中では唯一のものであります。館内には、農業、林業、畜産業、水産業などに関わる貴重な標本(動物・植物・土壌など)や、大学の最新の研究成果をわかりやすく紹介した展示があります。

■ 畜産別科

高等学校卒業またはそれ以上の学力のある者が、農学部附属する牧場(住吉フィールド)に周年宿泊して1年間修業する課程で、広く畜産業における後継者や技術指導者を養成します。本別科の所定の単位を取得した者には、家畜人工授精師の資格が与えられます。

■ 地域農林水産業教育研究センター

当センターは、地域に開かれた農学部の窓口として、学部における教育・研究の活性化、学部へ寄せられる多様な要望に応え、地域における農林水産業の発展に寄与するため、学部内措置により設置されています。



大学院

教育学研究科

【修士課程・専門職学位課程】
〈入学定員38人〉

平成20年4月、教育学研究科は、教職実践開発専攻(教職大学院:専門職学位課程)と学校教育支援専攻(修士課程)の2専攻に改組しました。

■学校教育支援専攻

(修士課程)〈入学定員10人〉

■教育臨床心理専修

学校のみならず家庭や社会の中で問題行動を示す児童生徒や障がいのある児童生徒について、臨床心理学的な観点や教育学的、生理学的観点等から分析し、理解を深めるとともに、すべての児童生徒の「心の教育」、「心の健康」の向上を目指して、専門的知見に裏付けられた対応能力を身につけたメンタルヘルスや特別支援教育のスペシャリストを育成することを目的としています。

■日本語教育支援専修

外国人児童生徒や海外からの帰国児童

生徒に対し、適切な指導助言を含む日本語教育の支援を行う能力を養うとともに、地域社会の外国人の支援や国際理解教育及び国際交流を推進する能力をもつ日本語支援教育専門家を養成することを目的としています。

■教職実践開発専攻

(教職大学院:専門職学位課程)〈入学定員28人〉

学校・学級経営コース、生徒指導・教育相談コース、教育課程・学習開発コース、教科領域教育実践開発コース4つのコースがあり、学校教育に関する理論及び応用を教授し、高度の専門性が求められる教職を担うための学識及び実践力・応用力を培うことを目的としています。



医学系研究科

【修士課程・博士課程】
（入学定員45人）

医学系研究科には、昭和55年に博士課程、平成15年に医科学専攻修士課程、そして平成17年に看護学専攻修士課程が設置されました。

平成20年度には、博士課程を改組し、4専攻から医学専攻の1専攻とし、2コースを設けました。

本研究科は「人間の複雑多彩な生命現象を形態学的、生理学的並びに生化学的に研究し、自然環境、社会環境をも研究対象として社会に貢献できる高い研究能力を持つ研究者を育成すること」を使命としています。

社会のニーズに対応するため、秋期入学制度、夜間履修制度、長期履修制度、短縮修了制度、ティーチング・アシスタント制度、リサーチ・アシスタント制度等を取り入れた教育・研究を行っています。

■修士課程（医科学専攻）（入学定員15人）

他の学問分野の学部卒業生を幅広く迎え入れ、広い視野に立って精深な学識を修得し、専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要な能力を養うことを目的とし、医学の発展と社会の福祉の向上に寄与する人材の育成を使命としています。

●求める人材

医学の基本的知識や研究手法を修得することで、これまでに培った専門分野での研究・技術開発に新たな視点から取り組むことを志す人。

他の学問分野の専門知識・技術を基盤として、新たな視点で医学・医療、福祉分野での問題解決に取り組むことを志す人。

他の学問分野で培った専門知識・技術を基盤として、学際的視点から生命科学研究の発展に寄与することを志す人。

■修士課程（看護学専攻）（入学定員10人）

問題解決能力を有する看護実践者の育成と看護学の教育・研究者の素地育成を目的として、各種の医療機関、保健・福祉施設、行政、教育・研究機関などにおいて、看護実践・指導・研究・教育ができる人材の育成を使命としています。

●求める人材

専門職業人として看護実践の質向上を図るために、より高度な問題解決能力や実践成果の検証方法の探究を志す人。

看護の分野において、専門的知識と学識及び基本的研究能力を培い、看護領域の教育者・研究者を志す人。

他の学問分野で培った専門知識・技術を基盤として、地域の保健・医療・福祉分野での実践、教育、研究の発展に寄与することを志す人。

■博士課程（入学定員20人）

博士課程では、学術の理論及び応用を教授し、その深奥を究めて、学術文化の継承発展に貢献することを目標とし、医学の発展と社会の福祉の向上に寄与する人材の育成を使命としています。

●求める人材

「研究者育成コース」では、幅広い専門知識と研究能力を培った国際的に活躍できる医学研究者・教育者を志す人。

「高度臨床医育成コース」では、高い倫理観を有する専門性の高い診断・治療技術に裏打ちされた高度な研究マインドをもった臨床医を志す人。



大学院

【修士課程】
〈入学定員114人〉

工学研究科

工学研究科は、平成19年度、農学工学総合研究科博士後期課程の設置に伴い、それまでの「博士後期課程」を発展的に解消し、「博士前期課程」を「修士課程」に改称しました。本研究科は、宮崎地域における高度な工学的学術の教育・研究機関として、高度で専門的な科学技術者を育成するとともに、学術研究活動を推進しています。

これまで、博士後期課程からは平成19年度修了の7名を加え合計96名の博士(工学)を輩出し、博士前期課程(修士課程)からは1,996名の工学修士を送り出しました。これらの博士や修士の修了者は、21世紀の科学技術の発展を担う高度な科学技術者・研究者として、地域社会はもとより、国際社会へも一層の貢献が期待されています。

■応用物理工学専攻(入学定員15人)

本専攻では、マイクロからマクロにわたる物質・エネルギー分野の基礎的研究を通して、多様な分野への応用力をもつ高度技術者の育成を目指し、量子物理、材料開発、計数物理、医学物理に関する教育と研究を行っています。未来の研究・開発の担い手として、自らを高める努力を惜しまないバランスのとれた人材育成を重視しています。

■物質環境化学専攻(入学定員21人)

本専攻では、地球環境や生態系と調和した材料化学、機能化学、物質化学および生物工学の分野に係わる物質環境化学の専門知識と柔軟な应用能力による専門的な研究開発能力を有し、創造性豊かな技術者・研究者の養成を目指しています。

■電気電子工学専攻(入学定員27人)

本専攻では、近年のマイクロエレクトロニクスとそれに伴うコンピュータの発展に伴い、電気電子工学も物理、数学などの基礎科学を取り込みながら進歩拡大しています。そこで、電気電子工学の分野を、電子材料、電子システム及び電気エネルギーの3つに分け、各分野の具体的且つ先進的な研究・教育を行っています。

■土木環境工学専攻(入学定員18人)

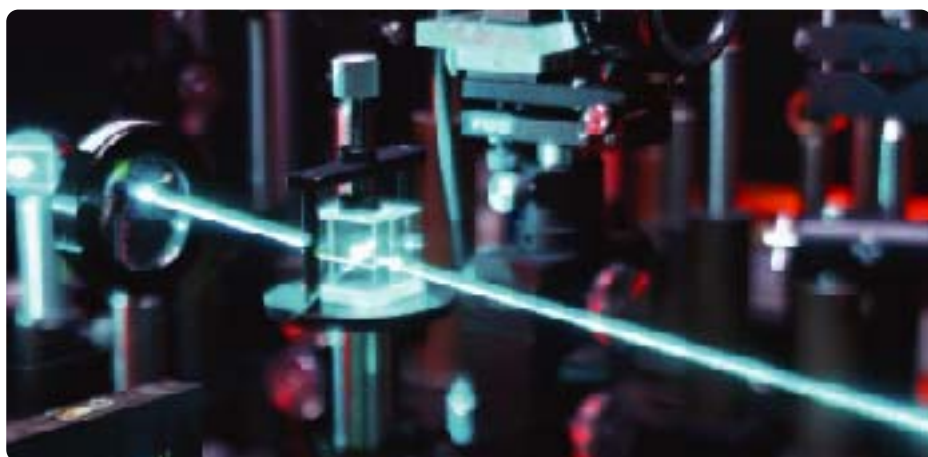
本専攻は、自然との共生を図りつつ生活・経済・文化・安全を支える社会基盤や生産基盤の充実・改善や、環境保全に貢献できる高度専門技術者の育成を目指しています。このため、建設工学、水環境や廃棄物処理工学、防災、都市計画などの高度な専門知識の修得と研究開発能力の養成に関する教育と研究を実施しています。

■機械システム工学専攻(入学定員15人)

本専攻では工業の基本である機械装置等の設計・開発の基礎とその応用およびエネルギーの有効利用に関する教育と研究を行っています。その主なテーマは、材料強度学を含む材料力学、加工学・トライボロジーを含む設計工学、内燃機関を主とした熱工学、数値解析を含めた流体工学、機械振動解析や計測・制御などです。

■情報システム工学専攻(入学定員18人)

本専攻では、並列プログラム言語、情報数理などの情報基礎分野、および知的制御系設計、知識情報処理技術などの情報応用分野に関する研究・教育を行い、より高度な技術と知識の研究・教育を通じて、情報科学・計算機科学・システム工学のより深い知識および広い应用能力をもつ人材の育成を行っています。



農学 研究科

【修士課程】
〈入学定員68人〉

農学研究科は、専門性の高い農学分野の5専攻(生物生産科学専攻、地域資源管理科学専攻、森林草地環境科学専攻、水産科学専攻、応用生物科学専攻)を備え、高度で先端的な科学技術を修得できる大学院教育を行います。すなわち、陸域・水圏を問わず、生物生産、生物資源利用、環境保全などに積極的に取り組み、将来の食と健康を担うべき農学分野での高度な専門的技術者・指導者あるいは研究者の育成を目指しています。また、農林水畜産業の生物生産から生物資源の利活用までの探求を通して、地域社会から国際社会まで幅広く活躍する人材を育成します。

そこで農学研究科では以下のような人を積極的に受け入れます。

1. 農学分野の学部レベルの専門知識を修得し、さらに高度の学究に努めたい人。
2. 他専門分野で学んだ知識を生かして、農学分野で新たに活躍したい人。
3. 社会の経験を有し、さらに農学分野の科学知識を深めたい人。
4. 食料・環境・生命・資源の関連科学分野において、国際的に活躍したい人。

■生物生産科学専攻(入学定員16人)

本専攻では、植物と動物を対象に「いかに生物生産を行うか」という農学の基本的課題の一つに焦点を当てた専門教育を行います。これからの動植物の生産は単に多収を目的とするだけではなく、生産過程の効率化と環境負荷の低減や生産物の安全性・品質の向上・安定的供給などが社会的に強く望まれています。このような観点から植物生産および動物生産の両分野の専門教育を深化させ、また、両分野を有機的に連携した新しい生物生産システムを志向する教育研究を行います。

■地域資源管理科学専攻(入学定員12人)

本専攻では、農林業生産の基盤となる水資源や土地資源、機械や施設構造物に関する技術資源、生産・流通を担う人や組織などの人的資源や情報資源などの総合的な管理・運用・評価に必要な知識と技術の修得を目標とした教育・研究を行います。

■森林草地環境科学専攻(入学定員10人)

本専攻は、地球上の陸圏生態系の60%以上を占める森林、草地および乾燥地域における環境科学ならびに生態系、資源管理に関する教育・研究を行います。森林、草地および乾燥地生態系の総合的な管理(生物資源の持続的生産、保全、再生および修復)を目指すフィールド科学と、そこで生産される生物資源の開発ならびに利用方策を探究する生物材料科学とを基本に展開される応用科学を担当します。

■水産科学専攻(入学定員10人)

本専攻では、海洋・河川・池沼など水圏における生物生産に関する幅広い基礎的知識や生態系との調和を前提とした生産技術およ

び研究手法を教育・研究しており、水圏生物の生息環境の保全、資源管理、増養殖、魚病対策、利用技術の開発等に関して倫理的でかつ高度な専門的知識の習得を目指します。延岡フィールドセンターにおける実践的なフィールド教育とともに、宮崎地域における唯一の水産科学分野のシンクタンクとして、研究推進、産業振興ならびに後継者育成における中心的役割を果たしています。

■応用生物科学専攻(入学定員20人)

本専攻は、動物、植物、微生物並びにそれらを利用した食品、また、それらを育む土壌・生態系が持つ機能を生化学的、遺伝子工学および食品機能学的に解明するための教育研究を行っています。学部(応用生物科学科)において修得した知識をベースとして、本専攻ではさらなる知識と技法を修得します。

●博士後期課程

鹿児島大学大学院連合農学研究科

平成19年度から宮崎大学大学院農学工学総合研究科(博士後期課程)の設置に伴い、鹿児島大学大学院連合農学研究科を離脱し入学者の募集を停止しました。なお、平成18年度入学生が修了するまで教育体制は存続します。

●博士課程

山口大学大学院連合獣医学研究科

山口大学、宮崎大学、鳥取大学、鹿児島大学の農学部獣医学科を連合して構成する博士課程です。獣医学に関する高度の専門的知識と豊かな学識をそなえ、かつ、柔軟な思考力と広い視野を持って社会の多様な方面で活躍できる高級技術者及び独創的な研究者の養成を目的としています。



大学院

農学工学総合研究科

【博士後期課程】
（入学定員16人）

農学工学総合研究科は、農学と工学の学問的背景と連携協力の実績を踏まえて、農学と工学が連携・融合した教育研究領域の深化を図り、広範な知識に基づいた総合的判断力と高度な研究能力を備え、技術・知識基盤社会の形成に資する高度専門技術者の養成を目指します。このような人材養成によって、21世紀の喫緊の課題である低環境負荷・持続型生産システムの構築、持続型地域社会が必要とする社会基盤の保全、生物及び微生物の機能を活かした新規機能性食品の開発、地域バイオマス資源の有効物質への変換、ナノテクノロジーを応用した機能性材料の創生、自然共生型エネルギーの活用とその変換技術、省エネルギー化・高度情報化された生産技術の開発、高度なソフトウェアを活用した情報処理システムの構築等の課題解決に貢献します。

●資源環境科学専攻（入学定員4人）

①環境共生科学 ②持続生産科学

資源の枯渇、自然及び生活環境の悪化、食料危機などの人類が直面しつつある課題に取り組むために、資源の有効利用と資源循環による環境負荷の低減を基調とした、安全で活力ある循環型社会の構築に貢献できる高度専門技術者の養成を目的としています。



●生物機能応用科学専攻（入学定員4人）

③生命機能科学 ④水域生物科学

動植物、微生物及び水産生物資源が有する諸機能の解明と、それに基づいた知見により、本地域及び国際社会が抱える食料・エネルギー・環境問題に貢献できる高度専門技術者の養成を目的としています。



●物質・情報工学専攻（入学定員8人）

⑤新材料エネルギー工学 ⑥生産工学 ⑦数理情報工学

環境調和・循環型及び高度情報化社会の課題に取り組むために、環境調和型新材料の構築、エネルギーの変換・解析、省エネルギー化・高度情報化された生産技術の開発、高度なアルゴリズムとソフトウェアを活用した情報処理技術及び数理モデルの構築に貢献できる高度専門技術者の養成を目的としています。



附属図書館

附属図書館(以下、「図書館」という)は、本館(木花キャンパス)と医学分館(清武キャンパス)から構成されており、宮崎大学における教育・研究を支援する組織として、また地域に貢献する組織として活動しています。

図書館の役割は、学術情報の収集・蓄積・提供、学習環境の整備などです。このため、図書館では長年にわたって、蔵書(蔵書数:約60万冊)を構築するとともに、近年はインターネットを介しての情報提供体制を整え、図書館資料(図書や雑誌など)が有効に活用される環境(ハード及びソフトの面)を整えるべく努めています。

これらのことを具体化するため、図書館では近年、学生用図書の充実、電子ジャーナル(学内限定でオンラインで利用できる学術雑誌)の整備、機関リポジトリ(学内生産の電子的研究成果物の収集・保存・発信)の拡充等に努めています。また図書館を有効に活用していただくため、ホームページの充実、文献検索講習会の開催などを実施しています。

大学には社会との連携が強く求められていますから、図書館においても、地域の方に図書館を開放するだけでなく、県内の大学図書館、公共図書館との連携の進展にも取り組んでいます。



図書館ホームページ <http://www.lib.miyazaki-u.ac.jp/>

附属図書館

●コレクション

【大正新脩大藏經 全100巻】

このコレクションは、膨大な数のインド仏典の漢訳を10年以上の歳月をかけて全100巻に編集したものです。梵語写本の多くが失われている現在、仏教研究者にとって漢訳仏典は非常に重要であり、特にこの大藏經はその校正の厳密さゆえに高く評価されています。

【イギリス教育史コレクション 467点】

このコレクションは、16世紀イギリスの人文主義教育思想家アスカムから20世紀に至るイギリスの教育思想(史)、教育史に関するオリジナル文献・研究書を幅広く収めています。

【アレン・ハット旧蔵 世界労働運動史コレクション 996点】

このコレクションは、「イギリス労働運動史」の著者として知られる労働運動史家アレン・ハットが所蔵していた、イギリス並びに英ソ関係を中心とした世界労働運動史の様々な文献から成り立っています。



教育研究施設 学内共同

●産学連携センター

産学連携センターは、産学連携・知的財産及び機器分析支援の3部門から構成されています。「産学連携部門」は、地域・産業界からの技術・科学相談に応じる他、大学シーズと企業ニーズをマッチングさせ、新たな共同研究を支援します。「知的財産部門」は、研究成果としての知的財産を管理する他、特許等を取得し、地域・産業界へ還元する役目を担います。「機器分析支援部門」は、特殊な分析機器を多数所有しており、各種試験・分析の依頼に応えます。以上のとおり、本学の産学連携の窓口として、地域産業界の振興に貢献することを目指しています。



●フロンティア科学実験総合センター

フロンティア科学実験総合センターは、学際的な生命科学研究を行う「生命科学研究部門」と教育・研究活動を支援する「実験支援部門」の2部門で構成されています。

「生命科学研究部門」は、「生理活性物質探索分野」、「生体機能制御分野」、「生命環境科学分野」の3分野で構成され、「生理活性ペプチドと生体システムの制御」などの研究を担っています。

「実験支援部門」は、次の4つの分野で構成されています。「生物資源分野」、「分子形態・機能解析分野」は清武キャンパス、「遺伝資源分野」は木花キャンパス、「RI分野」は両キャンパスにあり、本学の広範な教育研究活動の支援を主な業務とすると共に独自の研究を行っています。



●教育研究・地域連携センター

教育研究・地域連携センターは、平成19年4月、生涯学習教育研究センターと大学教育研究企画センターを統合し、大学の教育研究等の質の向上に関する調査・研究と併せて、生涯学習事業の企画運営等、広く地域社会との連携を推進するセンターとして再出発しました。

統合後のセンターでは以下の2点を目標にしています。

(1) 共通教育、専門教育から大学院教育までの大学教育の在り方、大学が果たす生涯学習支援の方策、学社融合に関わる研究により教育方法、入試方法、生涯学習支援方策等の改善を図る。

(2) 県民を対象とした大学公開講座の企画・運営、指導者養成、高等教育コンソーシアム宮崎における地域高等教育機関との連携等、大学と地域社会の交流促進を図り、地域社会の生活・文化の向上に寄与する。



●国際連携センター

国際連携センターは、本学と世界との架け橋として、本学の国際戦略に基づき学術研究や教育の国際連携・協力事業の企画立案やサポートを行ないます。「国際協力部門」は学術交流のほか、本学がコンサルタント登録しているJICAと連携して、国際教育協力、保健医療、アジア砒素汚染対策、農業開発などの事業を、「留学生支援部門」は多言語教育・日本語教育、国際広報、学生交流プログラム、生活指導などの事業を担当します。



安全衛生保健センター 情報化推進組織

●安全衛生保健センター

安全衛生保健センターは、学生及び教職員の心身の健康管理を専門的にサポートすると共に、学内で発生する事故を予防し、安全で快適な教育・研究・職場環境を形成するための提言や指導を行うための施設です。

日常業務では、急病やけがの応急処置をはじめ、生活習慣病に対するアドバイスや心理・精神的な問題に対するカウンセリング等を行っています。

また、実験・研究中や作業中の事故を防止するための啓発活動や各種安全マニュアルの策定等も行っています。

■主な業務内容は以下のとおりです。

1. 定期及び臨時健康診断とその保健指導等
2. 健康相談及び一次救急処置
3. 心の健康保持に必要な精神医療相談
4. 学内の環境衛生等に対する助言・指導
5. 保健管理・労働安全のための調査研究
6. 健康保持増進への予防医学的啓発と学生教育の支援
7. 職場復帰のための復職支援



●情報化推進組織

■情報戦略室

情報戦略室は、本学の情報化推進構想、戦略立案、ポリシー策定などにおいて統率的な役割を果たす組織です。情報運用管理及び情報技術に関する統括組織として、情報施策の立案及び情報関連の各種ポリシーや構想の策定、情報システムの改善や点検評価、セキュリティ対策、情報基盤検討、情報資源の戦略的運用、情報システムの機能的統合などの役割を担います。

■情報支援センター

情報支援センターは、情報戦略室の実務実行組織として教育研究活動及び大学運営等に必須なキャンパス・バックボーン、各種の情報ネットワークシステム、各種情報システム等の運用管理サービスを実施します。情報支援センターは、「情報基盤・システム運用部門」、「運営情報部門」、「教育・メディア情報部門」、「研究・学術情報部門」、「評価情報部門」の5つの部門から構成されています。



国際交流

宮崎大学は、国際交流事業として①学術交流、②学生交流、③国際協力、④地域の国際化への貢献の4つの柱を据え、地理的・歴史的な関係から、東アジア・東南アジアの大学等を中心に、活発な交流を展開しています。

国際貢献

●研究者の海外派遣・受入れ

文部科学省、日本学術振興会、国際協力機構(JICA)及び各種機関の助成等により、年間約300人の研究者が海外に派遣されており、外国人研究者も積極的に受け入れています。

●国際協力

本学ではJICAやNGO等と連携しながら、アジアやアフリカ、中南米等の開発途上国に対して積極的な国際協力を展開しています。

●国際交流協定

全学的・戦略的な学術交流・学生交流を推進するため、30の国や地域の大学等と交流協定を締結しています。うち、19大学とは学生交流覚書(授業料等相互不徴収)を締結し、活発な学生交流を図っています。

●留学生の受入れ

18カ国から国費・私費・政府派遣の留学生77名を受け入れ、教育研究を行うと共に、生活支援、学内での交流事業等を実施し、諸外国の指導的人材の育成に努めています。

●学生の海外派遣

宮崎大学では、学生交流覚書を締結している大学に、学生を派遣しています。協定

による留学は、休学の必要がなく留学先の大学の授業料等は免除されます。また、留学先で取得した単位を宮崎大学の単位とすることができます。

●短期学生交流の実施

宮崎大学では、海外の協定校と短期学生交流を実施しています。学生が相互訪問し、ホームステイ等を通じ、お互いの文化を学び、交流を深めています。また、「異文化交流体験学習」として教養科目の単位が認められています。

●地域社会の国際化への貢献

本学の外国人留学生は、県内の小中学校における各種国際交流事業や、国際交流団体が開催する国際理解事業等に参加し、地域社会の国際化へ貢献しています。



■主な学生交流覚書締結校

国名等	大学名	募集学部等	派遣学生
中国	南京農業大学	全学部	2名以内
中国	上海交通大学	全学部	1名以内
中国(台湾)	東呉大学外国語文學院	教育文化学部	2名以内
アメリカ	エヴァーグリーン州立大学	教育文化学部	2名以内
ニュージーランド	オタゴ大学教育学部	教育文化学部	3名以内
インドネシア	ブラウイジャヤ大学工学部	工学部	2名以内
タイ	プリンス・オブ・ソングラ大学医学部	医学部	4名以内
タイ	チュラロンコン大学獣医学部	農学部	2名以内

※その他派遣が可能な大学:青海大学 畜牧獣医科学院・中国農業大学(中国)、ボゴール農科大学・ハサヌティン大学(インドネシア)、嶺南大学校・順天大学校(韓国)、ハノイ農業大学(ベトナム)、フィリピン大学ロス・パニョス校・セントラルソン国立大学(フィリピン)、プエノスアイレス大学農学部(アルゼンチン)、リュブリアナ大学(スロベニア)



地域貢献

●公開講座、自治体等との連携事業の実施

宮崎大学では、公開講座、指導者養成事業などを自治体等との連携により実施し、事業の充実を図っています。さらに、地域連携及び学生の実践的な教育の観点から、「卒業研究テーマ」を一般に公募し、寄せられた研究テーマについて本学の学生が研究し発表するプログラムも実施しています。



●遠隔教育、情報提供の推進

宮崎大学では、宮崎健康福祉ネットワーク(はにわネット)、宮崎情報ハイウェー21(MJH21)等を活用した遠隔医療、遠隔教育等を実施しているほか、学内にインターネット放送局(MyaoH.TV)を開設し、地域への情報発信を積極的に行っています。

このほか、宮崎科学技術館に「宮崎大学展示コーナー」を設置し、本学の最先端の教育・研究の成果を広く県民に発信しています。



●宮崎大学サテライト・オフィス

地域社会への情報発信の場として、また地域の人々と交流しニーズを捉えるアンテナとして、さらには他の教育研究機関との交流・連携や産学官交流・連携の場として機能することを目的に、サテライト・オフィスを宮崎市の中心地に位置するカーリー宮崎(宮崎市橘通東4-8-1)8階に設置しています。

サテライト・オフィスには、パソコン等を備え、スタッフが窓口での対応にあたるほか、教育・研究成果の公開・発表、入学案内や各種催し物の案内、公開講座、各種相

談窓口の設置(技術、教育、健康など)、他大学等と連携した各種コンソーシアム事業等を展開しています。



●高等教育コンソーシアム宮崎

宮崎大学は、県内12の高等教育機関が連携した「高等教育コンソーシアム宮崎」の基幹大学として、単位互換、インターカレッジセミナー、合同進学説明会のほか、宮崎県経営者協会を窓口としたインターネット事業なども行っています。

●中学・高校等との連携事業

宮崎大学では、中学・高校等との連携を一層強化するため、出前講義、体験授業、公開授業などを継続的に実施しています。また、小・中・高教員の研修も含めた新しい「科学夢ロマン」事業を、宮崎県教育委員会との連携により取り組んでいます。

●地域住民に対する施設等の開放

宮崎大学では、附属図書館の日曜開館及び体育施設の開放を開始し、ホームページからも利用案内や予定表などが閲覧できるようになっています。今後は、地域住民の利用促進を図り、引き続き、施設等の開放を積極的に進めていきます。

木花キャンパス

農学部

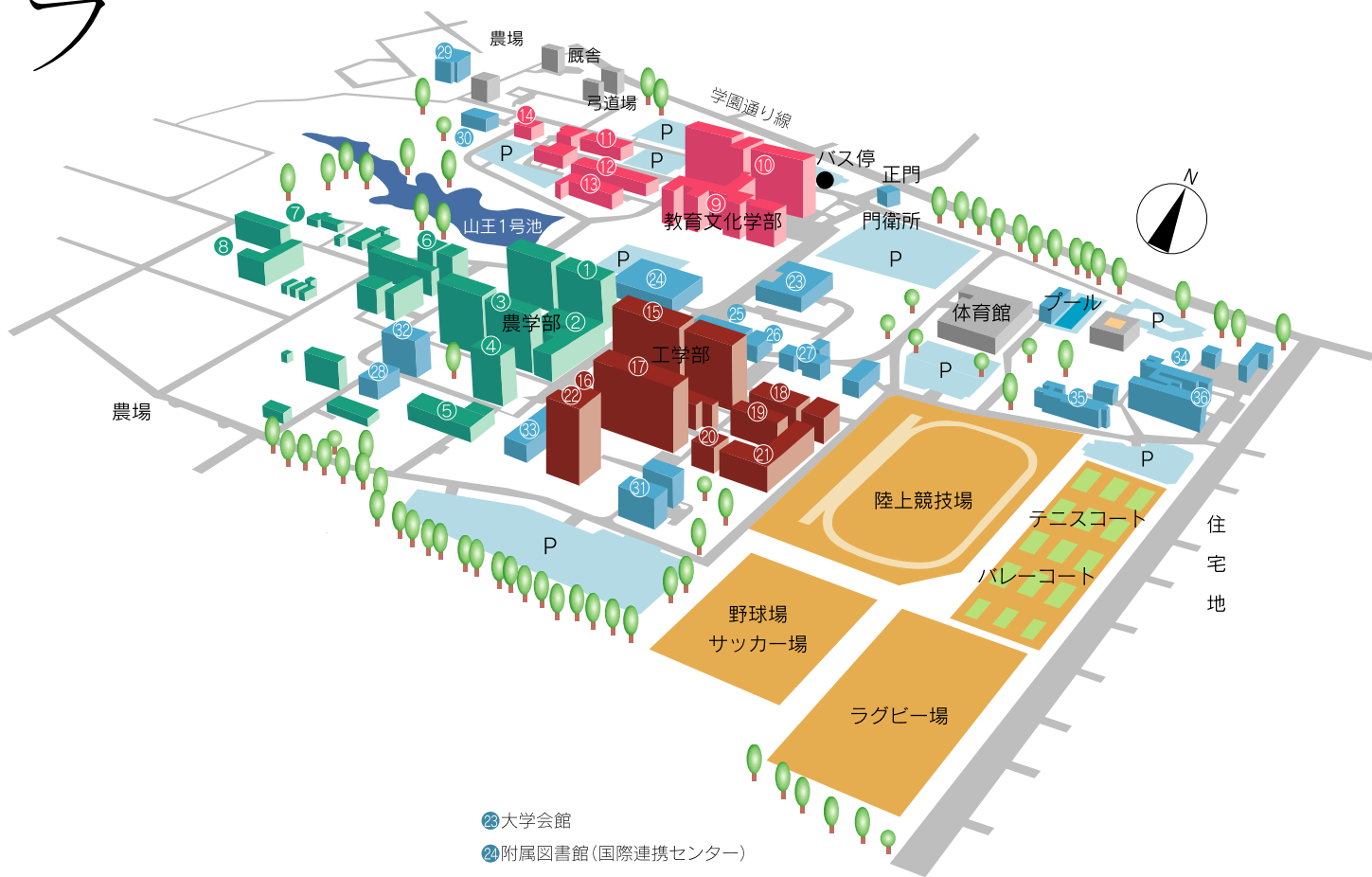
- ① 実験研究棟(北)
- ② 講義棟
- ③ 実験研究棟(南)
- ④ 実験研究棟(獣医)
- ⑤ 附属動物病院
- ⑥ 附属農業博物館
- ⑦ 標本植物温室
- ⑧ 附属自然共生フィールド
科学教育研究センター

教育文化学部

- ⑨ 講義棟
- ⑩ 実験研究棟
- ⑪ 美術棟
- ⑫ 技術・家庭棟
- ⑬ 音楽棟
- ⑭ 附属教育実践総合センター

工学部

- ⑮ 実験研究棟(A棟)
- ⑯ 講義棟(B棟)
- ⑰ 実験研究棟(C棟)
- ⑱ 機械実習工場
- ⑲ 機械工学実験実習棟
- ⑳ 高電圧実験棟
- ㉑ 土木工学実験実習棟
- ㉒ 実験研究棟(E棟)



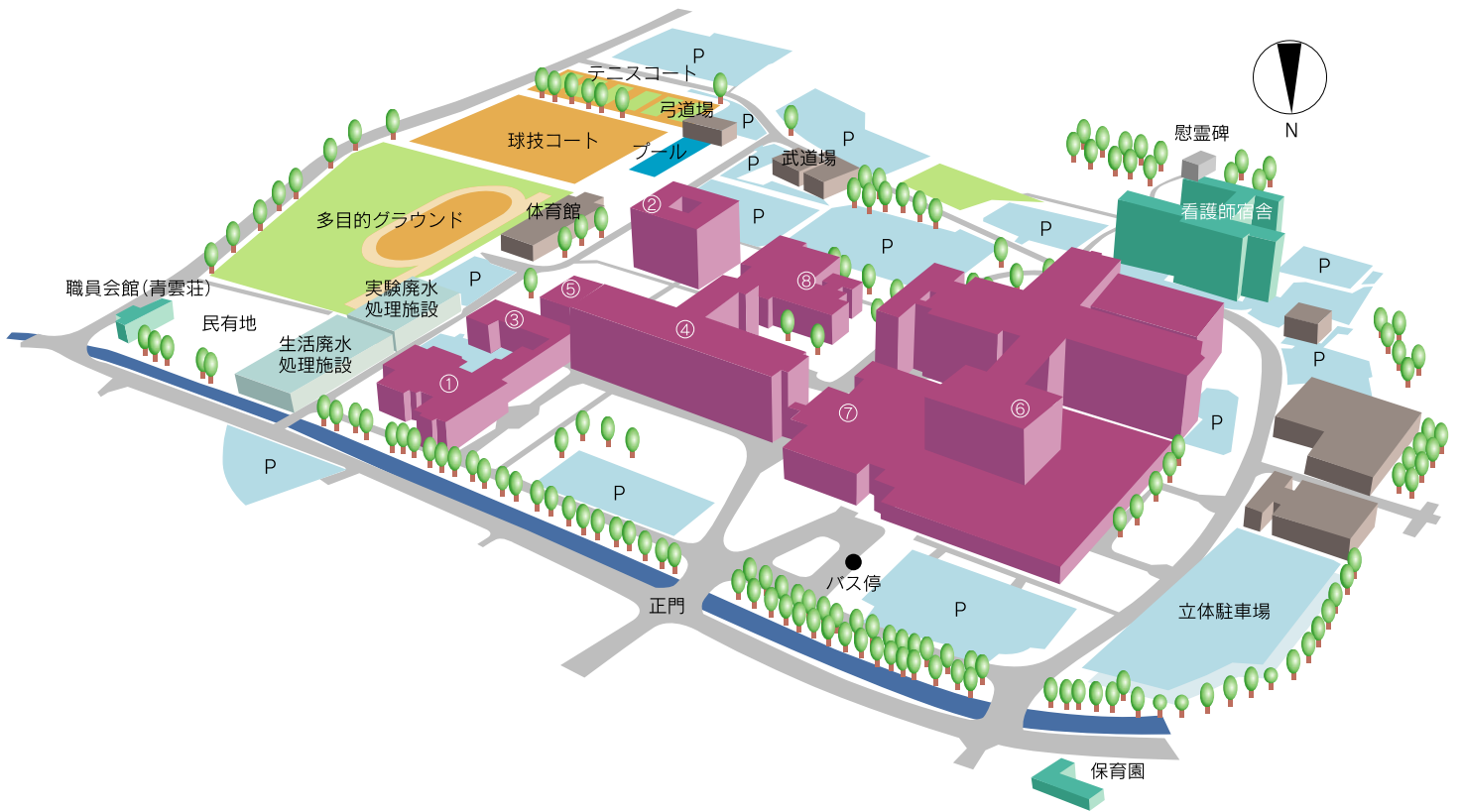
- ㉓ 大学会館
- ㉔ 附属図書館(国際連携センター)
- ㉕ 事務局棟
- ㉖ 安全衛生保健センター
- ㉗ 情報戦略室・情報支援センター
- ㉘ フロンティア科学実験総合センター(R I 木花分室)
- ㉙ 産学連携センター(産学連携施設)
- ㉚ 教育研究・地域連携センター
- ㉛ 産学連携センター(機器分析支援施設)
- ㉜ フロンティア科学実験総合センター(遺伝資源分野)
- ㉝ 総合研究棟
- ㉞ 国際交流会館
- ㉟ 女子寄宿舍
- ㊱ 男子寄宿舍

Kibana
Campus

清武キャンパス

医学部

- ① 講義実習棟
- ② 総合教育研究棟
- ③ 福利施設棟
- ④ 基礎臨床研究棟
- ⑤ 附属図書館医学分館
- ⑥ 附属病院
- ⑦ 管理棟
- ⑧ フロンティア科学実験総合センター



Kiyotake
Campus

アクセス

宮崎までの交通アクセス

■航空機

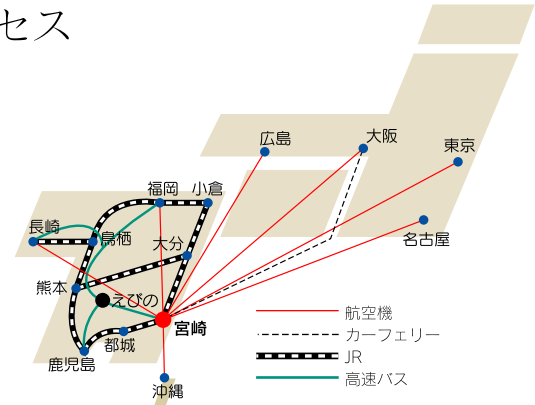
東京	—	宮崎	(105分)
名古屋	—	宮崎	(80分)
大阪	—	宮崎	(70分)
広島	—	宮崎	(60分)
福岡	—	宮崎	(40分)
長崎	—	宮崎	(40分)
沖縄	—	宮崎	(80分)

■カーフェリー

大阪	—	宮崎	(12時間20分)
----	---	----	-----------

■高速バス

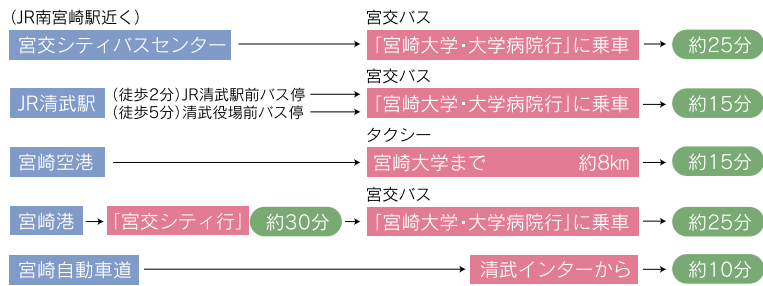
福岡	—	宮崎	(4時間)
熊本	—	宮崎	(3時間)
鹿児島	—	宮崎	(2時間30分)
長崎	—	宮崎	(5時間20分)



■JR(特急)

博多	—	宮崎	(5時間10分)
小倉	—	宮崎	(4時間30分)
熊本	—	宮崎	(3時間40分)
大分	—	宮崎	(3時間)
鹿児島中央	—	宮崎	(2時間10分)

宮崎大学までの交通機関



施設位置図

- ①宮崎大学(木花キャンパス)
- ②宮崎大学医学部(清武キャンパス)
- ③住吉フィールド(牧場)
- ④田野フィールド(演習林)
- ⑤(大納地区)
- ⑥(崎田地区)
- ⑦延岡フィールド(水産実験所)
- ⑧附属小学校・附属中学校
- ⑨附属幼稚園





平成20年度
国立大学法人 宮崎大学概要

〒889-2192 宮崎市学園木花台西1丁目1番地
URL <http://www.miyazaki-u.ac.jp/>

【編集発行】
国立大学法人宮崎大学広報戦略室
TEL(0985)58-7114 FAX(0985)58-2818

平成20年6月発行